

下村博文著「GDW 興国論 幸福度世界一の国へ」飛鳥新社 2021年4月26日刊を読む

## GDW興国論 幸福度世界一の国へ、プロローグ

### 1. 政治への開眼

- (1)①私が政治家への憧れ<sup>あこが</sup>を初めて自覚したのは、小学五年生の時。もちろん具体的なイメージはまだ曖昧<sup>あいまい</sup>なものではあったが、「政治家」という文字は憧れや尊敬の対象として容易には消えないイメージとなり、しっかりと胸の内に刻印された確かなものになっていた。
- ②私が生まれたのは、群馬県群馬郡倉淵村(現・高崎市倉淵)という人口六〇〇〇人ほどの山間の小さな村である。
- ③そんな辺鄙<sup>へんび</sup>な山の中で育った少年が、なぜそんな大それた夢を抱くようになったのか、その大きな夢の源泉になるのは、決してキラキラした輝かしいものではない。そこにあるのは最愛の父の突然の死という、あまりにもつらく悲しい出来事である。
- (2)①忘れもしない昭和三十八(一九六三)年十月九日の夜、父が交通事故で亡くなったのだ。その時、父は三十八歳、母は三十二歳、私はまだ九歳で、下の弟たちが五歳と一歳だった。
- ②当時、農協職員<sup>らくのうか</sup>の父は酪農家の育成に心血を注いでいた。あの運命の日、外は台風の接近で雨が降っていた。勤務を終えた父は「家畜を見てほしい」という村の人からの連絡で、雨の中オートバイで出かけて行った。その帰り道に事故は起きた。砂利道で父はオートバイのハンドルを取られ、道路脇の川へ転落してしまったのだ。即死だった。
- ③午後八時過ぎに、自宅のダイヤル式黒電話がけたたましく鳴った。電話に出た母が、何かせきこんだ口調で話していた。そして乱暴に受話器を置くと、「父ちゃんがケガをした。病院に行ってくるからコタツに入っておとなしくしてなさい」と言って、一歳の弟を背負い出て行った。
- (3)①事故と聞いて、ジワリと涙があふれてきたことははっきり覚えている。まだ何も具体的な情報は入ってないのに、なぜか私は「お父ちゃんは死んだ」と悟<sup>さと</sup>っていたのだ。
- ②大好きだった父が突然いなくなることへの恐怖と悲しみが、ない交ぜになって押し寄せてきた。
- ③あの時に感じた直観的な「父の死」だけは、今もって忘れることはできない。

### 2. 暗転

- (1)それから家族の生活は一変した。まだ昭和三十年代、保険など入っておらず、それまで田舎の平均的な庶民の家庭だったのが父の死によって、途端<sup>とたん</sup>に窮<sup>きゆう</sup>状<sup>じょう</sup>に陥った母子家庭となった。
- (2)その頃の母は、真っ暗な日の出前から畑仕事をして、昼間はやっと見つけたパートの仕事に行き、夕方に戻ると、今度は暗くなるまで畑や田んぼに出かけて農作業をするという、まさに寝る間もない、働きづめの生活を続けていた。
- (3)そんな母を私もいっしょに手伝っていたが、小学校三年の頃の我が家は、文字どおり「どん

底」だった。卵一個にしょうゆをかけて、それを兄弟三人で分けて、御飯に乗せていただくような生活をしていた。

### 3. 父の墓を護る

(1)①とうとう私たち家族のあまりの困窮こんきゆうぶりを見かねた近所の民生委員が「生活保護を受けたらいいじゃないか」と、母のところに勧めすすにやって来た。

その提案に、母は首を縦に振らなかった。

②ある日、母が、

「大事な話がある。来なさい」

と、まだ小学校三年だった私を呼び、そしてまるで大人に話すようなあらたまった口調で、生活保護を受けるかどうかを私に相談したのである。母にとって九歳の長男は下村家の大事な総領息子であり、父に代わるたった一人の頼るべき存在だったのである。

③母子で話し合った結果、とにかく自分たちで食べるくらいの田んぼや畑はあるからそれで自活していこう、病気で倒れてどうしてもダメになったら、生活保護を考えようとした。

「それまでは、博文はしっかり手伝ってくれるか」

と母に言われたので、私は母の片腕として農業を手伝うことにした。

(2)①その後、母は実家のある榛名町はるなまち(合併により高崎市に編入)に弟二人を連れて移り住んだが、私は近所の祖父母宅に一人残った。酪農の指導で村人に頼られていた尊敬できる父を、お墓に一人残していくことがいやだったからだ。

九歳の子供ながら、いっばしに「父の墓まもを護るのは僕しかない」と思っていた。

②学校は楽しかったが、家に帰ると、寂しさがつのった。悲しかったのは、父の生前はにこやかに話しかけてくれた村人が、手のひらを返すように冷たくなったことである。

③今思えば、それも理解できる。酪農を指導してくれる下村さんの坊ちゃんだから挨拶も交わすが、死んでしまったら小学生の子供を相手にする暇はない。農家は忙しい。それに日本は高度成長期に入ったばかりで地方の農村はまだ貧しく、村人にも精神的余裕がなかったのだろう。それまで暮らしていた家に、父方の祖父母つかを呼び寄せて、いざ生活を始めてみると、自分の家にもかかわらず、祖父母に気を遣い、子供ながらに常に気疲れを重ねる毎日だった。

やはり九歳の子供、三カ月もたつと精神的に限界を感じるようになった。

(3)①母が私を迎えに来てくれたのは、ちょうどそんな時だった。

②今でも忘れられないその母の姿と、「一緒に暮らそう」という一言。

③私は、張り詰めていた気持ちが一気に緩みゆる、感極まって号泣し、母と暮らすことを決めたのである。結局、母に泣きながら言われた「一緒に暮らそう、お前がいないと相談する相手がいらない」という一言が、私を住み慣れた父の家を後にさせ、母の元へ行くことを決心させることになった。

### 4. 無償の愛

(1)①実は私は、非常に厳しかった母に対して、以前は複雑な感情を抱いていた。必死に働き続けるきじょう気丈な母に、甘えることなどできない相談だった。褒められた記憶は、ほとんどない。もちろん、母に感謝の気持ちは持っていたが、それ以上に、厳しい母とはこれ以上もう

一緒に生活したくないと思うほど、拒否反応も強くなっていた。

②「九歳のとき、母は私を迎えに来てくれた」。時々、忘れかけた頃に、その出来事を、内省ないせいの中で思い出す。同様に、「十代の時は」、「二十代の時は」と、一つ一つの出来事を次々に振り返ると、あらためて気づくことがある。

③母には「自分は死んでもいい、お前のためだったら何でもしてあげたい」という思いがあったこと、いなくなった父の代わりに私には厳しく接しようとしていたこと、そしてその厳しさの中に、見返りを求めない「無償の愛」があったことを。同時に、その愛に包まれて、守られて自分が存在していることにも気づくのである。

(2)母と兄弟三人が、またいっしょに一つ屋根の下で暮らせるようになったことは、筆舌ひつぜつに尽くせない嬉しさだった。転校先では「よそ者」ということでいじめられ、「母子家庭」ということでもいじめられた。

「おまえんち、父ちゃんがないじゃないか」

と言いがかりをつけられるのだ。

悔しかったが、夜明け前から農作業、昼はパート、そして暗くなるまで再び田畑で働く母を見ると、弱音よわねを吐くことは出来なかった。

(3)①つらいことがたまりにたまると時々私は家を抜け出し、こっそり父の墓に行ったものだ。子供の足で歩いて一時間くらいだっただろうか。

②まずお墓の前で父に「会いに来ました」と報告する。そこから小さなスコップで穴を掘り、誰にも言えない自分の思いを書きつらねたノートの切れ端を、父の墓前に埋めた。

③書いていたのは他愛もないことだったが、これは父への手紙であり、当時の私の「生きるすべ術」でもあった。

「これからも見守ってください」

「強く生きられるよう、あの世から励ましてほしい」

などとお願ひしながら父と会話すると、お墓を後にした。

## 5. 政治家になりたい

(1)小学生の時、政治家になりたいと思った理由はいくつかある。

一つは、父が亡くなり私たちは世間の冷たさも味わったけれど、一方では温かい手を差し伸べてくれる人もいて、そんな人たちのおかげもあって何とか暮らしていくことができた。子供心に、

「大人になったら、そういう人たちに恩返しができる人間になろう。それが一番できる仕事が政治家だ」

と思ったのである。

(2)二つ目は、私が本が好きで英雄伝や偉人伝をむさぼるように読んでいて、その影響を大きく受けたことである。

①初めて母に本を買ってもらったのは、小学校四年の時だ。風邪をひいて、ひどい熱にうなされて、何日か学校を休んだことがある。

「何か欲しいものがあれば言ってごらん」

生活に余裕がなく甘えは一切許さなかった母も、こんな時だけは優しい言葉をかけてくれ

た。最初は断ったが、母の「言っでごらん」という何回目かの言葉に心が動き、私は本を買って来て欲しいと頼んだ。家には学校の教科書以外、本らしい本は一冊もなかった。

母はその日の仕事の帰りに、なけなしの金をはたいて一冊の本を買って来てくれた。もう題名は覚えていないが、それは十五人くらいの偉人や英雄たちの少年期を書いた物語だった。たしか、野口英世、二宮尊徳、豊臣秀吉、徳川家康、フランクリン、エジソンなどが載っていたと思う。

②以来、その本は私の一番の宝物になった。それは私と本の最初の出会いであり、何度も何度も繰り返し読んでいた姿を見た母は、その後、折に触れて、ワシントン、リンカーン、シュバイツァーなどの偉人伝も買ってくれた。

五、六年生ともなると、私の読書熱はさらに加速した。何しろ群馬の山の中の学校である、文化的な匂いなど皆無と言っていい。その中で唯一、学校の図書室にだけは自分のイメージを自由に膨らますことのできる空間があった。伝記物が大好きで、図書室にあった偉人伝はほとんど読み尽くしたと思う。

③土曜には必ず図書室で何冊か本を借り、天気が良いと自分で弁当を作り裏山に登った。浅間山や榛名山、赤城山が望める頂上の樹の下に座り、暗くなって字が見えなくなるまで一心不乱に本を読みふけた。貧しい生活の中で苦勞、苦学しながら這い上がった人物には、自分を当てはめて強く共感した。政治家になりたいという気持ちも、そんなところから生まれてきたのだろう。

(3)そして三つ目の理由、これはまさに天啓のようなものだった。

①五年生の授業で、どなたであったか文部大臣が書かれた文章を読む機会があった。読み終わった後、女性の教師から、

「ひろちゃんは、将来、文部大臣になるかもしれないね」

と言われたのである。先生は私を政治家に向いているともおっしゃった。

思わずハッとした。

何気ない一言で、おそらく先生はそんなことを言ったこと自体を忘れていていると思う。実は私自身も忘れてしまっていた。ところが、「心の時限爆弾」とでもいえるのかもしれない。その言葉は、十年後、二十年後によみがえってきたのである。

②まだその時は、政治家になることに現実感はなかった。どうしたらなれるか、皆目見当もつかなかった。その一言は私の「心の財産」となり、励みになったことは間違いない。実際に政治の道に進んでからも、その魔法の言葉は折に触れ、私の脳裏に浮かんで消えていった。

③アメリカの教育者、ウィリアム・ウォードが、こう言っている。

「凡庸な教師は指示をする。良い教師は、説明する。優れた教師は範となる。偉大な教師は、内なる炎に火をつける」と。

結果的に、小学生の眠っていた魂に、先生は火をつけ、インスピレーションを与えてくれたのである。

大きな試練の連続だった小学校時代が終わり中学校に入ると、私はもっぱらサッカーと農作業手伝いのアルバイトに明け暮れた。クラブ活動に没頭できたのは、小学校時代に比べ生活が多少楽になっていたからである。

## 6. 奨学金との出会い

(1)①その頃になると、政治家になりたいという気持ちはより明確になっていた。ところが、私は人前で話すのが大の苦手だった。国語の授業中、立って教科書を読むだけでも声は上ずり、顔は赤くなってしまふ。極度の上がり症で、大勢の人の前で演説するなど、考えただけでもゾッとした。だから政治家志望のことも、友だちには言えなかった。

②しかし、努力すれば自分を変えられるかもしれない。

「場慣れしなければ」と勇気をもって、年に一度の校内弁論大会に出場した。

初挑戦の一年生の時の結果は、惨めなものだった。壇上だんじょうに立った瞬間、頭が真っ白になり、原稿を持つ手はガタガタ震え、言葉が出てこない。何を話したのかわからないまま、持ち時間は終了した。

③落ち込んだが、赤面症せきめんしょうを治すチャンスだと自分に言い聞かせ、中二、中三と挑戦を続けた。そして三回目で、とうとう準優勝をつかんだのである。これで自信がついたのか、以来、赤面症も治ってしまった。

(2)①義務教育は中学三年で終わる。我が家の経済事情を考えると、普通高校は無理だろうと半ばあきらめていた。下に弟が二人おり、母は私が中学校を卒業したら就職して、経済的なことも含めて助けてくれると期待していた。中三の夏には母から、

「これからまだお金がかかるから、昼間は働いて夜間の定時制高校へ進んでほしい」と言われた。

②しかし青天の霹靂へきれき、ここで思いもよらぬ情報が飛び込んできた。学校の先生が、交通遺児育英会しやうがくきん(あしなが育英会の前身)の奨学金制度が充足することを教えてくれたのだ。どれほどうれしかったことか。

③「奨学金があれば普通高校に行ける」

母の許しを得て、私は急遽きゅうきよ進路を変えて群馬県立高崎高校、通称タカタカを目指すことにした。タカタカは福田赳夫ふくだだけお、中曽根康弘なかそねやすひろという二人の総理大臣を輩出はいしゆつした県下有数の進学校だ。

(3)①それから今までの遅れを取り戻すべく猛勉強を始め、何とかタカタカに合格した。そして晴れて、高校奨学生第一期生として奨学金の貸与を受けることができた。同時に、日本育英会(現・独立行政法人日本学生支援機構)の特別奨学金の給付も受けることができたのである。

②補足をすれば、私が高校を卒業した後は給付型ではなくなってしまったが、私が文部科学大臣の時に給付型の奨学金制度を復活するよう働きかけ、二〇二〇年四月から給付型が再スタートしている。

③私は給付型の奨学金があったからこそ、苦しいなかでも安心して高校生活を送ることができた。このような仕組みを作っていくことが政治の仕事ではないかと、その時思ったものだ。

## 7. 都の西北、早稲田の杜

(1)①大学受験は早稲田大学一本に絞った。

早稲田に行けば、政治家になれるという確信があったわけではない。その時は、政治家の

とうりゆうもん ゆうべんかい  
登竜門である雄弁会の存在さえも知らなかったのだ。

②もちろん、政治家になるためのノウハウなど何一つ知らず、伝手もなかった。その時にあったのは、

「政治家になるなら、まず大学に行かねばならない。行くなら早稲田だ」という思いだけだった。

③これほど早稲田にこだわったのは、大隈重信侯のおおくましげのぶの「学問の独立と活用」「東西文明の調和」という建学の精神に惹かれたこともある。個性的な政治家を多数輩出していることも魅力だった。さらに早稲田出身の作家、いつきひろゆき のさかあきゆき あこが 憧れていたことも大きな理由である。

(2)①大学に入る前、私は初めて社会の不条理というものを経験した。これも人生の糧となったので書いておく。

②高校卒業後、早稲田受験のために東京で勉強したいと考えた。調べてみると、苦学生のみを対象とする二食付きで寮完備という、大手新聞の販売店が品川にあることがわかった。朝夕新聞を配達すればあとは勉強できる。これはいいと、早速申し込んだ。

③農作業で早起きしていたため、朝早い仕事もまったく苦にならず、早朝店に新聞の束が届くと率先して区分けをし、雨の日も風の日も真っ先に配達に出た。配達ミスもなく、販売店の主人から随分ほめてもらった。

(3)①当時、成績優秀な配達員には奨学制度の一環でボーナスが出ていた。当然もらえるものと思っていたが、一向に支給されない。販売店の主人に聞くと成績考査で外されたと説明された。

どうにも納得がいかず、新聞社に直接問い合わせると、私の成績考査は上位であった。つまり、販売店の主人がボーナスを着服していたのである。私は怒り、青年らしい正義感で主人を告発した。結果、その新聞店に居づらくなり、辞めるしかなくなった。

②働いたのは半年間だったが、荷物をまとめて群馬に帰る際、ふと見ると店の門前に厄払いの塩が盛ってあった。はらわたが煮えくりかえる思いがし、この時ほど社会の不条理を強く感じたことはない。屈辱と敗北の感情が込み上げてきた。

③唯一の救いは、販売店の奨学生仲間が「来春大学で会おう」と見送ってくれたことである。彼らの励ましと怒りを胸に、私は「こんなことで負けてたまるか」と、がむしゃらに勉学に打ち込んだ。

P8 ~ 23

## <コメント>

衆議院議員で元文部科学大臣、下村博文先生の最新著は、先生の生い立ちから始まり、政治への開眼、厳しい中での学生時代を基礎に、コロナ禍後の日本の政治のあり方を示す貴重な作品です。

「志の高さ」こそが、あらゆる困難を乗り越える原動力であることがよくわかります。是非、御一読ください。

2021年5月17日(月)林明夫